

司会のことば

谷口興一*

わが国における心疾患の死亡率は経年的に増加し、遂に脳血管疾患を凌駕して、悪性腫瘍に次ぐ第2位をしめるようになった。一方、心疾患の種類をみると、かつては心疾患の主流を占めていた弁膜症が激減し、それに代わって虚血性心疾患が著しく増加している。しかしながら、その死亡率は必ずしも増加する傾向を示さず、頭打ちの状態である。その理由は、虚血性心疾患に対する考え方や診断と治療の体系に大きな変革が生じたことによる、と考えられる。

20世紀の後半に入ると、虚血性心疾患の診断と治療は画期的な進歩を遂げ、新しい概念の確立、新しい機器の開発、新しい手技の創始、新しい治療法の発明など、刮目に値する成果が招来された。その結果、虚血性心疾患の生命予後は著しく改善されている。欧米においては、冠動脈形成術（PTCA）および冠動脈バイパス手術（CABG）などの虚血性心疾患に対する治療法が普及し、多施設による十分な経験と検討によって広くコンセンサスが得られ、ほぼ同一の適応基準に基づいて行われ、施設間における治療法や治療成績の較差はほとんど認められない。さらに大規模な多施設共同の追跡調査が実施されているので、治療成績の全貌がほぼ明らかにされている。しかし、わが国においては、治療適応の考え方や治療法の選択が医師の好みによって、また個々の施設の独自の

方針によって大きな片寄りがみられる。したがって、欧米のように多施設の成績を集計して、同一の見解で生命予後を評価することは極めて困難である。

本シンポジウムでは、前述のような背景を勘案して、比較的片寄りが少なく、欧米に近い標準的な治療適応に基づいて診療を行っている本邦の一流施設の中から6施設を選び、その第一人者をシンポジストとして選んだ。討論の内容は、時間の制約もあるので、虚血性心疾患の生命予後を左右する重要な因子として、心筋梗塞の急性期治療、再灌流療法、PTCA および CABG の適応、CABG の周術期管理、心室リモデリングの6項目を選択し、それぞれの治療法と予後との関係について詳述していただいた。各シンポジストにより熱意ある討論が展開され、会場の反響も含めて、虚血性心疾患の生命予後にとって大切な要素は何であるか、それをどう実施すればよいか、という本質的な要点が本シンポジウムによって浮き彫りにされたように思う。

さらに、本シンポジウムで発表された成績とそれについての討論は、虚血性心疾患の治療の正しいあり方を、医学的・行政的および社会的な観点から多角的に示したものであり、生命予後の改善を目標とする虚血性心疾患の臨床に対して示唆に富む方向を示すものである。

*群馬県立循環器病センター